

どんびま

2011年4月27日発行
 発行者 花の湖農業小学校

さくら

「花は桜・・・」
 と云うようにサクラは日本を代表する花であり、日本人の美意識を象徴する花でもある。

日本人がサクラの咲くのを待ち焦がれ、散りゆく風情までを愛でるのも、農耕民族の血がさわぐものと思われる。サクラのサは稲



の精霊・神様のことで、クラは神の座る場所である。つまりサクラの花は稲作の開始の目印だった。各地に残る苗代桜がそれである。我が家にもある。

北国東北の春は遅い。今年は未曾有の大災害の後、寒い陽気が続いていた。被災された人たちは今年ほど暖かい春を待ち望まれたことはなかろうと思いやられる。

待望の春になっても、塩害や放射能汚染で耕作不可能などのニュースをやり切れない思いで見ている。咲き誇るサクラの花が少しでも人々の心を晴らし、一人でも多くの人を元気づけてくれることを願うばかりである。 (草)

5月授業日のご案内

- 日程 5月15日(日)
- 受付 9:00～9:30
- 始めの会 9:30～9:40
- 授業(畑仕事) 9:40～11:30
草取り・土寄せ・苗植えなど
- 昼食 11:30～13:00
- 授業(田植え) 13:00～15:00
田植え後バケツ稲の説明をして土・苗を配ります。
- 終わりの会 15:00～15:15

- 締め切り 5月11日(厳守)

- 問い合わせ・緊急連絡

TEL 0573-75-4417 ・ 090-5110-9362 (山内總太郎)

- 服装 作業のできる服装
- 持ち物 手袋、タオル、長靴、雨具、買い物袋、お茶、箸、食器着替え(天気がよくても)
- 郷土料理 草餅、ぼた餅、みそ汁等
- ☆かぼちゃの苗は1本持参して下さい。それぞれの名札を立てて、かぼちゃ畑に植えます。
- ☆田植えは雨が降ってもやります。天気が良くて泥んこになります。
- ☆バケツ稲用の土を配ります。10リットル位のバケツをお持ち下さい。

～とくちゃんの農小レポート～

久し振りに栂の湖の桜満開の授業日

栂の湖桜が満開の時期に授業日となりました。栂の湖西岸から観る景色は絶景です。水面に満開の桜が影を映し、遙かに恵那山(2191M)を望むアングルは、カメラマンには絶好の被写体となっています。

1 午前の授業。

***きのこ菌の打ち込み。** 今年は樫の木の本に椎茸の駒菌を、一人一本宛で打ち込みました。一昨年は原木が小さかったのですが、掲示板の写真のように大きな茸が出来ました。来年の秋には沢山の椎茸が採れますのでご期待下さい。

***畑の作業。** レタス、ねぎ、サニーレタス、白菜、ブロッコリー等の苗を植え付けました。それぞれの苗の形は覚えられましたか？ また大根、牛蒡の種を蒔きました。秋の牛蒡堀りは卒業試験？と云われていますのでお楽しみに！

2 持ち帰り。

プランターと土、レタスの苗。ほかにポットと南瓜の種2粒。かぼちゃの苗が出来たら1株は、農小に持ってきて共同圃場に植え付けます。残りはプランターや花壇の隅等に植えてみて下さい。植える場所がなければ農小に持ってきて頂いても結構です。種の赤いのは消毒薬の色です。水をやり過ぎないようにして上手く育ててくださいネ！

3 昼食。

筍ご飯の弁当をもらって、栂の湖オートキャンプ場に移動しました。おかずは、手羽元のさっぱり煮、煮玉子、ホウレン草のおひたし、コンニャクとニンジンの白和え、竹輪と筍の天ぷら、ゼリー。

4 午後は運動会。

オートキャンプ場のグラウンドを借り切った運動会で、各グループ毎の対抗で4種目に挑戦しました。

***大縄跳び。** 5人ずつの3組が挑戦し、飛んだ回数のトータルで順位決定。

***おさるの籠屋。** 父兄が担ぐ竹竿に生徒がぶら下がりのリレー。

***パン食い競争。** 各学年毎に出場し、最後は入学前の幼児も参加しました。
この種目は採点対象にはなりません。

***あめんぼう。** 1本の竹竿に5人が掴り、三角ポストを廻ってくるリレー。

***綱引き。** 各G長のじゃんけんで組み合わせが決まり、トーナメント方式で戦いました。場所を変えての2回で勝負が付かず、3回も引きあった組もあり、白熱した戦いが繰り広げられました。

総合成績は次の通りです。1位にはニューヨークチケットが授与されました。

1位2G 210点 2位3G 160点 3位1G 150点

4位5G 130点 5位4G 100点

(採点は1位50点で順に10点下がり。綱引きは倍点でした。)

～とくちゃんのちょっと一言～

十数年前までは秋に各地域毎の運動会が行われていましたが、近年は見かけなくなりました。祭りや盆踊り、運動会などの行事が少なくなり寂しい気がします。農小の運動会では親子が協力する種目が殆んどで、見ている方はとても微笑ましく感じられます。綱引きなどは応援にも思わず力がはいります。お父さんお母さん方はさぞお疲れだった事でしょう。歳を取ると疲れが遅く出ます。

次の日に疲れが出た方は若い証拠です！。くれぐれもお体ご自愛のほどを！！

～安保兄の百姓ぼなし～

原発はいらない

あぼ兄の家から農小へ向かう途中に「新盛座」という芝居小屋があった。この地方にはかつては村毎に芝居小屋があった。「新盛座」は上野の白山神社の境内にあって、地歌舞伎や旅回りの芝居・演芸を楽しむ村の社交場だったが、今から30年ほど前に焼失してしまった。

「新盛座」はあぼ兄たちがフォークソングの仲間たちと、活動の拠点として借りていた場所だ。1969～71年3回の全日本フォークジャンボリーが終わった後、フィールドフォークといって、お祭り騒ぎでなく日々の生活に根差した物作り・歌作りの活動を続けてきた。場所を変えては、物作りを習ったり、遊んだり、小さなコンサートをしたりする中で、メインイベントは「新盛座」で春と秋に催す「新作発表会」だった。フォーク歌手の高石ともやの率いる関西勢をはじめ地元はもちろん全国から集まった仲間が一晩中楽しんだ。芝居小屋の慣習で食事も酒も入った。歌や寸劇など観る人は全員出演者でもあって、もちろんあぼ兄も歌った。面白ければ皆が舞台に見入り、さもなければ鋭いやじが飛んだり後ろ向きで飲み食いが始まって、ある意味厳しく凄い場所だった。

地方から発信するアマチュアの発表会だけでなく、様々な文化行事も催した。詩人の谷川俊太郎、永六輔、海外からもケーナ奏者のウニャ・ラモス、黒人ジャズ歌手(名前は?)などなどの詩の朗読会・講演会・コンサートなどをした。

その中で、あぼ兄が感動したのは高橋竹山(初代)だった。竹山はステージに座るとまるで岩のようで、太棹から流れる早いテンポの津軽三味線の音は耳からだけでなく床からも力強く響いて心にも身体にもしみた。裏方のあぼ兄は竹山一行を送迎する運転手だった。車中での竹山は昔の東北の農村の生活や自分の体験を話された。米の不作、凶作の年は、お父は出稼ぎに子どもは奉公に出たと云う。後年のテレビドラマ「おしん」を見て竹山の話を読み出した。おしんが奉公に出る別れのシーンやお母が冬の冷たい川に入って流産を試みるシーンにダブらせて今も思い出す。

竹山は盲目のため穀潰し(ごくつぶし)と云われ、習い覚えた三味線を弾いて物乞いをする旅を回った。冬の北海道も回った。厳冬の北海道は辛かったと話された。

凶作で自家米すら足らないのに年貢米の厳しい取り立てを受ける農民たちの苦しい生活の中で生まれた歌が民謡になっているとも言われた。「民謡は百姓の軍歌ですよ。」と話された竹山の声は今も耳に残る。

米国に住む黒人たちは奴隷制に苦しんだ歴史がある。厳しい生活の中で生まれた歌がジャズだ。苦しみを一瞬でも忘れ、心いやしてくれた黒人の歌ジャズもいつしか白人の手に渡ったとか聞く。日本の民謡も庶民の生活から離れてしまっている。農業の衰退と同時に農民の戦いの歌・抵抗の歌民謡も消えてしまうのか？

時代も事情も大きく変わったが、北国東北の人たちの普段の厳しい自然との闘いに追い打ちをかけたような今回の災害は、大地震・大津波にとどまらず、放射能に脅かされる事態となった。原発から20km圏内からの避難と云うが、農民にしてみれば田畑を持って避難するわけにもいかず、何時終息するとも知れない放射能汚染に自宅へ帰れる期限の見通しも無い。放射能汚染や津波による塩害で耕作が出来ない耕地は2万haと気の遠くなるような面積に及ぶと云う。

同じ農民として、幾重にも重なる被害と、何時まで続くか知れぬ余震に怯え、偏見や風評被害にも苦しめられる現状に心が痛む。

天災では片付けられない人災。人間の行うことに絶対完全はないことが分かった。農民としても思う、人間生活に原発はいらないと。

～かなちゃんの虫日記～

田んぼはおいしいお米をつくるところですが、
アメンボやトンボ、カエルなど田んぼでくらす
生きものにとっては^{じんせい}人生にかかるとてもだいじな
ところ。 (人生じゃなくてアメンボ生? トンボ生? カエル生?)

4月、田んぼの前に田んぼに水をためると ^{ケロケロ}
^{ケロケロ}
カエルの声がきこえてきます。アメンボもすいすいと
あまっています。冬の間、じっと^{とみん}冬眠してまっていた
かれらは、あたたかくなったので水のためられた田んぼに
あらわれてきました。トンボのすがたはまたみあたりませんが
ヤゴというトンボの子どもが水の中にいます。1体は
あまりにいていませんが^{かお}顔はトンボの顔そのもの!!
ヤゴは水の中でくらし、アメンボは水面に
おちた虫をたべ、^{たまご}卵がかかるとしんでしまいます。
カエルは卵もオタマシクシも水の中でしかくらしません。
これらの生きものは水がないと生きていけません!!!
水がたっぷりあった田んぼは最高にひらたりにす☆



人が毎年田んぼをつかえば、生きもののおかあさん
たちは安心して卵をうみつづけられます。
だから、田んぼをしよう! お米もりもりたべよう!

